

ニッポン+ブルックリンのカッコいい部屋27

名作住宅の誕生ストーリー

BRUTUS[®]

2011 5/15 特別定価 630 円

物語が生まれる部屋。



居住空間学 2011

IN BROOKLYN STYLE

家は自分の手で築く、それがブルックリンの流儀。

エコロジカルな家を、楽しく手作りしてみる。

Benton Brown

● サステイナブル工務店／コンサルタント会社〈Big Sue〉代表

Susan Boyle

● 〈Big Sue〉共同経営者

マンハッタンから河一つ隔てた、ブルックリン。若者文化の発信地、ウィリアムズバーグ地区を筆頭に、ほどよくレイドバックしたセンスの良い独自の感性が育まれてきた街である。魅力は何と言っても、狭くて地価の高いマンハッタンとは対照的な、ゆったりとしたスペースだ。そこから生まれる伸びやかな創造性を、30代を中心とした若いファミリーやシングルが享受する。ブルックリン人たちの、家や世界への向き合い方を見てみよう。

建物の床を全階外して設置し直した際に余った梁を、仲間たちと接ぎ合わせて巨大なダイニングテーブルの天板にした。ランプの傘もビルの廃材の再利用。左の棚に並ぶのはベントン（写真右）とスーザン（左）が屋上で養蜂、採取したハチミツだ。娘も大好物。



天井の扇風機からは、優しい風が常に降り注ぐ。間仕切りの役割も果たす本棚、テーブルにベンチも全てビルの廃材で製作した。奥に見えるのは、水を入れて使うタイプの古い冷蔵庫。ただしくまで飾りとして。150年前に製氷工場だったこのビルへのオマージュだ。



このビルに放置されていた年代不詳のロッカーは、物入れとして再利用。そばに立てかけられた板は、照明の修理など高いところで作業する際の足場として使う。シンク横の作業台は美術大学のゴミ捨て場から拾ってきたキャビネットに自作のセメント板を載せたもの。



オフィス、リビング、ダイニングキッチンのある3階から、寝室やバスルームのある4階へ向かう階段。手すりはベントンが鋳造。カウチの後ろに床暖房の制御パネル。壁の左側に見えるひときわ大きな額には、1860年代当時の設計図が。建物内から偶然「発掘」した。

古い建物を自ら徹底改造、サステイナブルな住空間。

自 分の手で何でも作ってしまうDIY精神はブルックリン人に共通とはいえ、ここまで信念を貫き通したリノベーションは珍しい。2001年、新婚2カ月のベントン・ブラウンとスーザン・ボイルが購入したのは1860年代に建てられた老朽ビル。かつてビール醸造所や製氷工場だったこの建物は過去20年間、放置の憂き目に遭っていた。大量のハトが住み着くこの廃屋も、「限りなくボロボロの建物を」と探し求めていた彼らにとっては、最高の理想物件だったという。

夫のベントンはもともと彫刻家。著名アートのスペースで建設や鋳造の手腕を発揮していた人物でもあった。一方、妻のスーザンは大学で環境学を修め、地球に優しい交通手段を提唱する団体に勤務していた、エコロジカル生活の実践者。仲間の手を借りながら、2人は2年半かけて、限りなくサステイナブルな住居を自力で作りに上げる。まずは地上建物の床や天井を全て取り払い、壁を整え、床を入れ直す。ガスや水道、電気も全て自分で引いた。屋上にはもう1階分増築し、寝室やバスルーム、子供部屋をコツコツ作っていった。

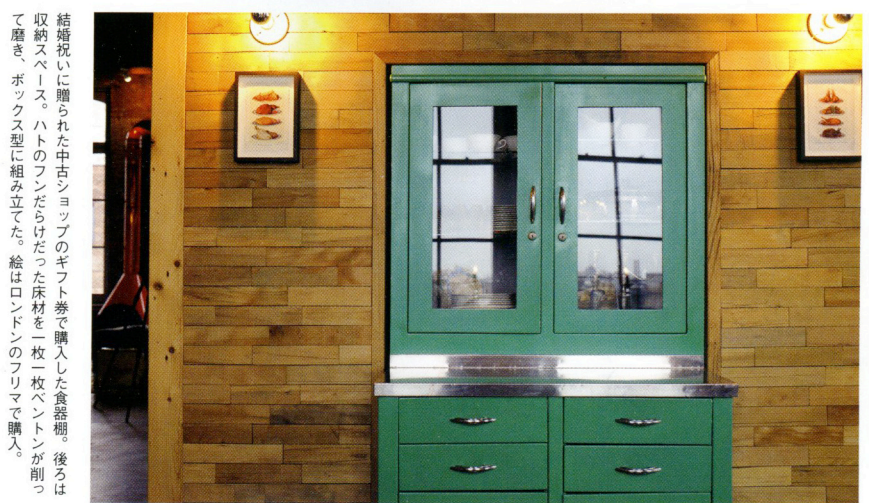
夫婦の狙いは「建物の歴史や佇まいを残しながら、全く新しい空間を」。だから、改修で建物から出た廃材は床や天井、家具に再利用。400本にも及ぶ梁もほぼ全て、形を変えて建物のあちこちに収まっている。冬は床暖房と大きな断熱ガラス窓、夏は自然な空気循環によりエアコンは一切不要。電化製品やボイラーも省エネ型、トイレは雨水利用。床のコンクリートは廃棄物のフライアッシュ（石炭灰）を多めに配合してある。そう、コンクリートも全て彼らが型に流し込み、固めたものだ。しかも昼間の電力を全て賄うのは、屋上のソーラーパネル。コストのかかるこれらの設備も、ニューヨーク州の環境建築促成の補助金を獲得し、全体の建設予算の3分の1がカバーできた。

緑化された屋上には、春から秋までアルプスの草花が生い茂る。ミツバチの飼育を始めたら、初めてのハチミツ収穫量がなんと70キロ余り。「Red Beard」と名づけ、地元の市場で販売し始めた。地下にある巨大なトンネルでは、チーズ工房を始める計画も。昔ながらの普遍的なものを慈しみながらの温故知新ライフ、これぞブルックリン。



ベントン・ブラウン (右)
スーザン・ボイル (左)

テネシー州ナッシュヴィルで生まれ育ったベントンは現在、NY州出身の妻スーザンと共にサステイナブルな改築・施工や屋上緑化のコンサルタントを手がける。5歳の娘ノラの自慢は「周りの友達には誰も持っていない長くて青い室内ブランコ」(左ページ右側)だ。



ニューヨークでの独身時代からベントンが愛用しているキャビネット。その上には「1950年代ばさぎ魅力」というレトロな水筒コレクション。自作以外の家具は拾ったり中古ショップで安く買ったものだった。

多忙な毎日にあつて、熱帯魚の姿にホッと安らぎを感じる。水槽は中古。時計と温度計は建物管理の最重要アイテム。1950年代のバーマ椅子は建物内で見つけた。壁の絵はコミュニティセンターで一枚1ドル。

結婚祝いに贈られた中古ショップのギフト券で購入した食器棚。後ろは収納スペース。ハトのフンだらけだった床材を一枚一枚ベントンが削って磨き、ボックス型に組み立てた。絵はロンドンのフリーマで購入。